

## 高等学校の視点から ～授業の進め方と対策～

鹿児島県立鶴丸高等学校 教諭  
春日井 優

令和7年度の大学入学共通テストにおいて、はじめて共通教科情報の科目「情報Ⅰ」が実施された。あわせて既卒者対象の「旧情報」の試験も実施された。本稿においては「情報Ⅰ」について述べることとする。

初回であり過去問が存在せず、事前に公開された試作問題やサンプル問題などを参考に手探りで指導せざるを得なかった。今回の共通テストの出題傾向を整理し、今後の学校における指導の方向性を探りたい。

大学入試センターから発表された「情報Ⅰ」の平均点は69.26点、標準偏差が16.09であった。他教科と比較するとやや平均点が高い傾向にあるが、基準がない中での作問として、難易度を設定されていると感じた。今後は他教科にあわせて調整されると考えられ、若干難化するだろう。

大問ごとの分野と配点については、第1問の小問集合で20点、第2問の複数の設問がある問題が2つの場面で30点、第3問の「プログラミング」の大問が25点、第4問の「データの活用」の大問が25点となっており、この構成は事前に示された試作問題とほぼ同様であった。「旧情報」との共通問題が出題されたため出題分野と配点に制約があったと考えられる。その一方で、学習指導要領の今次改訂において小学校からプログラミング学習が導入されたことと、数理・データサイエンス分野で活躍する人材育成の流れがある。そのため、これらの分野の配点が高くなる傾向は続くと考えられる。

分野間のバランスについては、ややコミュニケーションと情報デザインについての配点が低く、コンピュータとプログラミングの配点が高くなっていた。前述の大問構成で、第2問において「モ

デル化とシミュレーション」が出題されたためである。学習指導要領での分類では、「プログラミング」と「モデル化とシミュレーション」が同じ内容のため、この分野の配点が高くなったと考えられる。今回は「情報に関する法規」や「情報デザイン」の配点は低いが、これらの分野が軽視されていると考えるのは早計である。また、入試で出題されるか否かにより授業での軽重を決めるのは本末転倒で、「情報Ⅰ」で育成すべき資質・能力を育成できるように授業を実践していく必要がある。共通テストでの出題傾向を意識することがあっても、振り回されないようにすべきと考える。

問題の形式は、レシートを題材に情報システムについて思考する問題など、具体的な場面を通して思考力、判断力、表現力等を測る形式となっていた。また、知識を問う問題では、単純に知識を問うのではなく、深く理解していることを求める問い方となっていた。

追試も一部新聞社から公表され、同様の傾向がみられた。本試と同様に学習指導要領で求められる資質・能力を測定しようと、さまざまな工夫が凝らされていた。大学入試センターおよび出題者から「情報Ⅰ」の授業を本来の趣旨に沿って行ってほしいとのメッセージではないだろうか。

学校現場では、具体的な場面を対象に情報や情報技術を活用して問題解決を行うような授業の実践を進めることが、共通テストにもつながると考えられる。このような学習経験を生徒がすることに加えて、同様の形式の問題演習をして共通テストの形式に慣れていくことが、共通テストの対策になるのではないかと考えている。

「情報」の教科選択率が65.5%で全教科の中で最も低かった。直前に実施された「数学②」の受験率が69.0%であり、「数学②」を受験しない者にとっては空白の時間帯となってしまうためではないだろうか。私立大学志望者も「情報Ⅰ」を選択できる多様な進路希望に対応する日程となるよう再検討を求めたい。